[illegible]工醴　乾

911.3
工
乾

修羅の滝ハ。不動尊大滝ニて
醸し。積りあるをけハ。味(?)ハ
を出し穴にたくハふ。大小の瓶ハ
異(コトナ)ましれ。甚所ハ。瓶もつな
るん細し。をいのの妻松。手た
流みちめくに誇梅しして到
は礼
気をとしてあるい。人に

ぬるら。世にみちふくるまゝに。一葉
に纏(ツヾ)りて。世の人と供にせむとする
が。猿の醴(アマザケ)にかれなれおしむたくひ
にはあらで。大海のおほかれんを以
ら死て。世界万物のあまりしなど
悲むとするにや。盃縁(サカコトバ)はさるまゆら
去りにけらし。宍て其集にも
名は付けらし。

南山

猿醴集巻之一

春之部

茶にあそぶ人々にすゝめ(?)…かすまくを
いはひさ骨戸に松竹なをかち
たる三醒か宿に初日をまつ

蓬莱や猿の木間は夜の明て　蓬松

いさ俵ゑゑんすしろは粥　三醒

去年の鴨や烟の…　巣居

楮木の縄をいはひてもとく　杣

松風は作三町ハ皆月秋　醒

西瓜の色のうすき年か　居

聟は友ハ角力のまけ口によはる也　杣

くるふ我ふわよ悲うちくらし　醒

此筆洲へとりけもなけれし公慕ふ　居

あやめは風呂を居ゑて宵　杣

鶯の香の中よ擣めのそと拵て　醒

宮のうつ孫の中くし清し　居

刷やくよ小重は咲る線の月　杣

雲ホ棲く漆もや念佛我て　醒

花咲の日さ年よ子櫓をかけるし　居

一るやりるニ人落英公は京　醒

領よや少く解よ眉よ春のいふかん　杣

名の都しろき鶯編笠羽　居

花さかり一日ハ絶す志かす者　白石　皃子

坂口や花にあきたる人の声　尾張　竹有

鶯のきのふたか音や梅の花　一ノ関　世竹

月は出も日のあしも浅き芝かな　仙台　子孝

行戸の足も出かけ雲かる水　石はし　湖雲

山作れ一年こしく庭か家　六山　青鶴

花ちる様も出かけて幽魂せよ　仙台　三つ

俄こゝろ月か出て来て鳴蛙　相川　呉風

猫の恋聖に秋ゆ出て氣なから　伊予　摽堂

霞濃ちの山へる春の夕かな　本宮　秋夫

枝花のいろもふかく啼雲雀　水沢　完車

こすれその山かけ櫻咲にけり　出羽　亀年

桃桜に旭さすや花のやま　仙台　竹丈

春の夕思ひしよりも身ハ帰　イニツ　晋萩

上戸にハなかりきは花に散りけり　古川　其帆

梅か枝の瞟よきゝ杖にまかりけり　モリ岡　平角

花まちて見れハまさし峰の寺　仙タイ　雪香
貝ならの寄も花のあしらひ　スカ川　雨考
花まうる人ハ覚路れハおろかなら　金成　尤来
のこるさへお茶にむかしら淡の麻　イシワ　旧人
海苔楽の上ゃまて蝶のゆくまよ　水沢　戸湍
咲そ居るしはし人の梅の花　蓬杣
酒よりも鳩のおとすゝ梅比忘　ケセヌマ　亜圭
ものかれ尚んえてあの梅の岸　仙タイ　馬年

山の宿に寝ても忘る放紙かな　信濃　素檗
文紙に吟て涙ても散る比の雪　岩谷堂　白推
春いまた寒のまえにや雁の帰る　吉田　羽游
壬申のとし　寅子の間
万よしや咲ふるまと
松島ハ席已に家ハ恵方也　三本木　酔月
冬れ來る居の友さに春の空　宮ヤ　曽兆
恋猫の尾につく餅ぬくこれ　石津　可兮
海に入くもかなせ春の月　京　月居

鶯も啼まれぬうち春ふる山　ワカ柳 甘棠

山さハ家の角しさみかぶり　サカリ 湛兆

揚雲雀雨の笠のうしろより　イシワ 住九

寐所をいふ鳴もしそけり雉子　武堂改 呂竹

暮る日を土ふまする咲や山桜　岩谷堂 蘭岱

箟蔭も白ふの汁あらたの露　吉田 圓三

ま流れしやの雫る梨子花　イシワ 兜州改 梅谷

月を見るを来たの風を田おふ　サカリ 一布

山寺の声よわしし山の梅　金成 同志

梅咲や古い髪より硯売　ホロハ 秀阿

浪たつハ堂んとて遊ぶ芽柳　水サハ 凡城

洗足や柵の見へなる二つ三つ　二本松 與人

在宮彼 来東

いかし吹く霞かくるや松の門　金成 芙蓉

春芽子て垂れや羽織の袖たゝミ　尾張 梅間

えんたてしや意地男山　江戸 貫恂

酒賣の名も有よかし門柳　大サカ 雄桂

まろんとこけせんとこく柳可那　高ヤシキ 以言

若やまうよく雇はれて山の家　サカリ 一竿

楊而かやと問へハ柳のしだれ花　水沢 筭了

かすミこめて宿かりするの声千也　宮野 可伯

うかゝ忘れ候ふ森の猫の妻　江戸 完来

うけふまぬ日わり桜の咲くより　金成 長寸

咲来やゆかうけ垂く山かすす　イシハ 山人

霞むかいくるも焼なか秩父山　岩谷堂 薫履

春の海潟ふね声ハなりけり　ワカ柳 兜州

雉啼や花の人をとゞめて　サカリ 廣陵

名月のかとしも縄切る夜かな　ミナト 吟調

つかしぬる子もぬれし梅の花　仙ダイ 房也

世八草の勝なれ我ハ艸の飯　仙ダイ　海山

田面うけて霞むや駒のむら躍　古川　雷九

湖の名れ高きよ春れ月　金成　東鳥

行先れおかれを越すら隅田川　相川　立富

浮橋の日和りんよ行柳かな　城生　吐牛

花鳥よとり見さ行し行梅しら　若柳　相思

松よ巣をつくり初る乙鳥哉　水沢　雉雄

春の山日のくれるさへおし花　サカリ　五鳥

虎杖や花ともぬ日のかさしもの　金成　百童

切りのも梅よまらせん一位船　ワカ柳　曽明

別れけのこぼれて咲や花すみれ　岩谷堂　啓眉

若緑く艸よ揺て見せる春の山　イサカ　仙支

折られ咲すしや古枝く窓の梅　佐沼　月呑

明ぼのの外にあまわたる蛙かな　イシカ　如陸

りしきや和山の風れたる梢　小林　哥中

何も吟らに雉の声きこ思ふ子　宮古　北溟

蹲なす身てゆく秋ハ柳のちる心かな　花枚 雛路

花咲くや雨より水に行まじく　仙タイ 芳鶴

閨の宵や由比か浜時鳥啼　ミナト 白来

あか代や松をたちれてあかれ山　折カヘ 随馬

しらけすやとぶせうる秋の川辺　真山 岐岱

学のうしろハかはりれりかるき　下井カ 物與

三日月や柳の風受梅中さき　岩谷堂 寸龍

青柳や根やすくもなき扇貫　イシツ 五岳

遠野の秋をせめらんきこの水　葉ヶ谷 青牛

うらかすや月の寐の戸をし明けたし　仙タイ 呂九

青柳の下ゆく人や都かな　九戸 文雄

春るは此山ハ桜よ時ハむかしれ　蓬松

うき世やふけて目なる此ゆくへ　出羽 楓二

たらすをたれか田野のうひ住居　尾張 士朗

梨の花ちられハ秋としきする　一ノ関 守村

子そりうその鍬うんきこの淵　兎年

まよさへ花にむしりは、たなかりけり　仙タイ　暁来

清童はよき名もちけり佛の前　衣ヶ関　二浪

春風のほころびによ根笹垣　ミホ子　星河

きのふから今日ふかれて柳なりけり　青牛

うぐひすの小坂小磯を行ませ兎　、鷺洲

余所に飛ぐ埋りたくなき春霞　仙タイ　霍鴨

青柳の月にかけたる小枝かな　九モリ　東舟

ト想るを世にまかせてや山桜　彫工　少緑

夕くれの山本の蛙啼に化利　今如　兎園

雨に明くことわりもせ放沢下ら　若柳　東玉

鶯の巣や茶臼の多のすゞ名花　小林　可笑

青天や井戸の中まで梅の香　多田　其石

菜の花も餘け薄之東山　今如　淇作

月や梅の影にわれをわすれけり　イシノ　風喰

氣のまよれぬ有きれたるつ風　猿楽　志由

正月や猿の袴も人らしき　モトヨ　真々

巳ヶ月をさかえあけてや嶋田嫁　仙タイ　曽外

鶯啼て花の山ある枝ヶ明し　ハカ柳　東明

花のさかりなまて茂るしふもと山　受徳　千阿

志ら雲のさそひ出したり柳の芽　イシワ　嘯雲

春るゝけふ家もや海のへり　氣仙沼　几留

咲ちる花を松風ゆるや春の雨　岩ヶ崎　嵐兄

春るゝにさ東お旅の小傳す那　ミヤノ　董雨

咲きの春や花あり浪の音　カンナリ　壽玉

鶴声よりも出そて吉春の風　一ノ関　操颿

旭ともいまてよりかさし柳　三本木　梧井

さくらかなふ梅ゝえらこへ名の雀　折カヘ　斯馨

淡来するハミ那旅人と織月　イシワ　其桂

月雪の扇せんとけたゝき　ミナト　四方

三日月はとゝ崩出て梅の花　金成　露卿

霞月の様の木間かんせ不かゆ　山ノ目　玄々

足もかれ標有八志ら浪春の海　相模　葛三

雪ふらハ削し蒼め山の梅　中麻 志の女

山からす霞めんとしてきのふ　渋谷 喜毛

星き白の影もむなしき花屋　岩やキ 扇雄

梅折よ真れハ海なんで艸のしゐ　近江 丁當

白しゐや深よここえた守見る路　タカク 秋吏

かくれ家にかくれ鶯啼ふれり　大原 暁市

市中を出ぬけて見れ日和かな　ワカ柳 求古

一もとへれなく梨の花折かね　イシツ 女 喜葉

年よりへして知れり花の人　佐渡 可成

きけもなく色れぬれぞ梅の雨　タカタ 蟻月

暮の春 折にうらなをすますや　ミナト 完也

…春日…の名に染のもふあまる　一ノセキ 几隠

雛啼や垣根の雪は延ひある　宮城　草居

時ならぬ奴凧子のあはれや雉の声　イシマ　浦人

藤の花宿こそたかき匂ひけり　江戸　春錢

大凡の雪のけしきや大石畦　八幡　可之翁

すゞみ寸声の井より帰る雁　遙松

一重咲華也浮世へいらはれ　山目　高松

雪くや楊子埋む流の松枝　高城　葛父

ふして飛すは霰子むせふり柳　尾張　大阜

やゝまハあしたれ貧し梅の花　仙タイ　月奎

小松ゆらや雲のとふらる声のる　江戸　旦々

春風やさらで下せぬれる此宿　増田　松兮

華の戸や猫のあはれる機の音　仙タイ　佛二

くもる日ゝ照りて雨こそに啼雛子　阪川　一青

さいそまは鶯ハ時るぬ春の雨　呉風

鍛冶の麦ハきのふの花の宿　仙タイ　白蘿

此ほこの花芝ませて山を焼　カンナリ　倚松

花に来る人のこゝろを見て宿す　仙タイ 楚白
松の実の澤に浮れ去の雪　芝山 巣尼
茅の戸やすゝめハ那梅の花　和川 百峯
佛ますもなくて春ある山家哉　仙タイ 標國
藤雲やうるさき雛の声、　北平
初桜いつもしこ丈日ならなら　肥前 祥禾
けむられて出る河井の須磨　石コシ 苔城
画なきりのへ出るく日の永さ　不陵

まどあけて月を見ん流る梅の花　仙タイ 且谷
青柳の影に縁とてしらバ　相川 士彦
明き去と押なす紀理の柳かな　前沢 雄友
花くもき露に小雨降くら籠や　仙タイ 年々
啼蛙草のしげまで淋しいか、　立德
栗せよ奥の間までも根岸か　高清水 陽谷
ちる桜あとに極楽世界の花　仙タイ 曽有
湖の庵りを見る梅柳、　扇風

鶯ハ宮中なるよ鄙も啼　南部 卓堂

志ら魚ハ此三日月をたくミし鉤　花牧 浣恵

桐の実や春からを紀紙壷　仙ダイ 毛ゝ龍

花ちらハ七日中るや浮世人、　雪九

朔日をまうし奴花の咲へけ、　六川

三味ハられ人の花から春の風　尾張 岳輅

于春村行

梅見とて出れハ牛まとゐむ衣かな　白石 鬼孫

猿醴集巻之二

夏之部

重花山ふく　有夕

森人の飛脚春の山樹涼し

月をたゝくの文が月の宣　遂松

まる秋を古き笠まさく　夕

芭のさかる膝を抱まくり　松

玉綿の名もしらね里の袖赤くと　夕

雨ふりたける空の晴ながら　松

あの坂や駒のうしろに隠れん　夕

通りへして楽な菴なれ　松

手古咄の茶の味も變し字の手　夕

蔦麦川節ハさきさ日のきれ　松

仲楽具の賑りハ町人の御用て　丶

きのふ比ハからふも浪かむ　夕

名月の答えに出る笹のうへ　松

おつろうてかん宍のうら枯　夕

解々の眉など扇にすりけて　松

瀬々の比春に流み斤見　夕

すゝき花ハ家の庭のそこ也　松

をんな年かけて清む香細屋　夕

のゝ蝉の帰去菴の枝ふり　（仙タイ）南山

川音をきけすけおとならぬ秋隣　（ミナト）曽粲

凩の月よのミつえそ蝉の聲　（岩や平）春居

杜宇旅寝の窓の涼もなし　蓬松

夜山やかゝしくにひまかれ雲　（大ヶ）餐英

名を見る月や後のふくもなるての川　二須

澁の唐茶すふりもるに八静なる波　（猫シて）呂臺

むつゝしきええに月あり粟の花　（ケセヌて）巾来

順ふる人にも似くさみ月雲　戸満

夕立の行くの雫しおや傘すき　（イレツ）交山嶽

夜の月扇は戸八外に見る　（小サイ）梵吟

墨染の袖八綠あをあきかへし　（ミナト 中年）蒼夫

名を弁ふ枝のけさ色の露ゆく　（ミヤノ）夜六

川より蝶の粟淋し清緒あ　（イレツ）史方

折とりて哀さえつ行し　杜宇　子孝

五六代芍薬つくる山家かな　士朗

ともし火や涼しき水のさはりに　ケセヌイ　風坡

雨はれて宿やさゝくよ時雨　古川　そん孝

むら雲に風ハまかせて夜の月　三本木　堀甫

閑古鳥松売の花ハ獄も咲く　彩城　卜三

梯の花星祭なき萩ハおそらく　一ヤヽ　可冠

待ちて咲く人さくあるに時雨　小沢　雨詰

若ふ桜や散てもまた仏生会　大木　東栄

卯の花やよふの見えぬ初時雨　湊　あき女

寄須に頼萩の月術化粧　今坂　長呂

松風のたよへるあんてゐる　サヌで　呑馬

とんねいに曲り起しかり帽中　ミナト　七女

見るまでの名白なふてゐしの跡　一ノ関　八汁

題曾我画

承ゝ猶ん姫の文亡父月安士　古川　柏庭

首明や川に掃こむ蚊居　金ヶ崎　松谷

此妹のあはれの月日ハ松の風　仙タイ　百渉

一夜の小笹たゝきさんいふりしとの　イシウ　呉枫

若竹や白雲のうけれぬけかゝる　湛兆

東風を撰にも嫁入時分　岩や寺　良大

日のさゝぬ松ミこもすし関所　若柳　只六人

ひらくと夜のしれけり稲田かな　揚乐

紙雛の暮れ去ふ蕪子嫁ふ　塩竈　和節

涼風れ月に押さし松の人　ミナト　此梅

夕たちや遊ひ子の行田の雲通り　前沢　玉雁

ミしら積や芋の丈継肯傍杖　手丑　梨青

樫のしよあけ見て啼や杜宇　淞峯　素湖

牡丹芍薬ハ人每ふめてつる翁ひもきるへきるのなまじいひかれハ松井の閑適なるてゐんきやさぬそいやむしとて武人帝を去きりまにあて拍を植さしむるに清陰にて庵てりて夜たきさ年のやうれおもひかされてる山流水も膝を容るのくらゝ跡りて涼気深し

庵のさる蛍浮すハあゆまう化利　世竹

宏ろんよ丸あるめ肩ふみ子のうしろつよ　松淼　几村

花や宝閣よりも黒き塗まくら　出羽 帆二

草枕てうかれたる旅あはれ　仙タイ 之曲

蝶は菜をいくへ継ても子規　箕舟

ふりへく帰せてみるこしぐれ　二十ト 禾二

卯の花や高き宮も十五日　高田 白推

蜻蛉のりくさふれの風　一ノ関 吐心

ちらつきのやうに来て帰るの鶉が　イシワ 者来

時雨る閨の夜んすてきつる哉　永沢 す延

門よきは月夜に似てやりの花　二十ト みを

雲の尾にあをかけたる夜の月　月鉾 清羅

石井もつましき入るや冷し汁　ホロハ 桂林

心の秋のくれてもなまけや垣根雪　三本木 兎六

牡丹花や秋にかしつく親の秋　雪香

夕かほの花にたち見る蛙哉　石コシ 中村 桃児

庭松に冬の風ありおちすゝれ　一ノ関 怒牛

散りすぎもむらの花の数　岩谷堂 方耕

時鳥啼し夜也見んて並ん　佐倉　若人

三日月のちらちら出る稼賣　イセ　涼堂

人さらにゐるも田植の木蔭かな　古川　駄鶴

風薫る色こそ那須の子木かな　熱寄　乙芦

辛崎の松に借む芸もなき吹ほ枝より出る一夜ハ浪に浸すさこし

草庵の屋根突ぬくな時鳥　一ノ関　圃翠

淋しいゐるの中も菖蒲賣　房也

つかしく見んホとの日かの旧尺かな　尾張　臥央

元日の志結になりて井桂かな　折カ人　保知字

すゝ風の音にふせらる小笠かな　ミナト　八百人

此橋をゐぬるる夜の月　八才　閑子

ちやく咲く一年になりぬ花　古川　標柱

朔日ハ一夜月よ寝とし春　ミヤ　田雀量

卯の花や抱えとんで雨すゞし　小沢　雨静

口ゐ恵を池にもちすな蓮の錦　塩竈　酸月

栗まじや是常も聖ハ月見草　蓮松

善光寺にて

若葉にもつゝける雲や堂の口　箱館 布席

花に寐て、枕借して閑古とり　小渋 立邦

星のめくりうへくて松の涼ミ哉　ミナト 月舩

古き家ふ菅笠もありて茶も之　大坂 春耕

森ころく濡の瀬ふ流れけり　ベイヤ 南溟

門の外に秋葉の月の入りに化粧　イミツ 碧樹

秋に名をきかしめて田植　月館 楳友

あさかほ菖蒲やよし涼風の粒　ミナト たつ女

里ハ少し涼へ行く蚊屋吊月　藤衣 亜同

夜の風柱に竹しく化粧　イミツ 一叢

麦畑めくし涼みの世ある夜の月　三本木 酔月

井くにゝ水をも飲しし行て子　ミナト 一志

あらし里ねよ知て鵜の帰る　坂川 仙呂

夕立やあれは降雨に出ぬ　肥後 對竹

山ほともれハ高ふ窓涼し　ケセヌマ 几翁

すゞしさのうつりになるてはおとしき　豊前　真澄

膳にむいて折るやまて田の華すゝむ　ワカ柳　文馬

夜の山や霧もたのまれ飛ほたる　播广　玉屑

ゆきつれ老も稲あをし声への雁　入首　百方

蓬瓶に修や水越の茶あり　イヅミ　兎道

松原や帷子かゝく日の夕　芳鶴

ミじか夜や月にかけらん檜柱　今泉　九巣

見付もすく夜ハ明にならける　ミナト　萏道

されハこそ涼しさ宗祇松の月　金成　調式

称くハ風を出る雲の峰　越中　虚白

んこうる晴や垣根のうらみまち　具凢

余花ぞよけ足白雲の酒の上　カヒ貝　木且

卯月八日牧山にて

帆にあれくつゑハれハ神の子　ミナト　芬朝

稼先の山に川原に畑ねける　伊勢　粟人

冠毛の有や苦れ走れ布を扇　与人

夕顔の花や垣屋の明たれ　岩谷堂 態眉

ふくまする雲や暑さの花ヶ実ヶ　イシツ 白阿

帷子や浮気ふまぬ呂びあや　完卓

發判や皆いふえ閑古鳥　三醒

大佛の灯ともりよりけ高く　百峯

麦秋や何よりもの山の方　曾外

我宿ふしても梅ゆくさ咲き　越後 喜年

七道具の大鋸挽を武蔵坊にて浮世子
小風呂敷は西行之独行ぞ子淵も俳三昧
明暮句に暮にあける筆にて唯早筆
紀るは耳草を見ても書きは八雷あるしも
と古今の推敲も拾えたる多かる中に七ッ外の治
餘情なき句を永く世に伝ひ能しき風一
田の蓮拙坊四素松嶋の旅居に新著す
定のなびくも評を待ずして一枝を蔵の

笛もふく法螺はまさ江戸の名もとゞろき此東
下の方ゝ地ゝ此猫も天國ゝ剣をきざめる
ぬく二冊として濁子、波をもて切もし開
殿を領とし洒落記随脳を撰せる心は躍
趣そなれしと鳩をさ綴す此のみ記

濁斎識 三

てはく

登西呈子清三月ちらいり

學園 和宇 短大 第6593號 受入 昭和36.3.14